年 頭 所 感

２０１０年1月４日
株式会社トクヤマ
社 長　幸後 和壽

昨年は景況感の変化に想像以上のものがあり、当社の経営環境も厳しい中、ものづくりへの原点回帰に取組んだ１年であった。また、１月８日の樹脂サッシ不正問題の公表以降、トクヤマグループが一丸となり信頼回復に取り組んだ１年でもあった。

昨年、日本経済の４－６月期はＶ字回復の様相を見せたものの、その後の景気回復は緩やかであった。国内の景気回復度合は、ピーク時の 80%前後と推測され、残念ながら我々の予想を下回る結果となった。金融危機以降、世界の生産活動に急ブレーキがかかったが、金融システムの動揺が一段落すれば景気も上昇に転ずる局面が遅からずやってくるといった、やや楽観的な期待感があったことも否めない。

４月からは「挑戦と変革」をキーワードにした「100 周年ビジョン」の第一ステップである３ヵ年計画の最終年度となるが、事業環境をふまえ見直しが必要となる。中長期的な成長戦略も、先端材料市場の需給状況、回復スピードを考えれば、目標の達成は難しい状況にある。次期３ヵ年計画においても、成長戦略、事業戦略の見直しに取り組み、必ずや 100 周年ビジョンの最終目標を達成したい。

トクヤマのミッションは『ものづくり』。このような局面では現場に奇策はない。地道に泥臭く、原点に返り、『徹底的に合理化』を行う。無論、製造だけではなく、開発、営業、本社間接部門のすべてが、局面打開に向け、穴が開くまで見つめ、考え、行動する。そうすれば乾いた雑巾も絞れるようになる。そう思い込む必要がある。

今年は、『技術開発体制の再構築』を行う。個々のテーマ案件について、開発から上市まで、技術、品質、顧客視点でＰＤＣＡが円滑に廻るようなサポートチームを発足させる。研究開発に積極的に資源を投入し、スピード感を持たせ、収益の向上に結びつける。

トクヤマグループ 5,300 人。経営から現場までが一体感を持ち、まさしく今ここにある危機、この厳しい局面を乗り切っていきたい。一人ひとりが考え、行動する、その現場にトクヤマグループを変革する力があると信じている。

以上